

8-4			
主題	ケアプラン目標に直結した支援経過記録の取り方		
副題	生きたケアプランの実現		
キーワード1 支援経過記録管理	キーワード2 ケアの統一化	研究期間	14 ヶ月
法人名	社会福祉法人 不二健育会		
事業所名	グループホーム かもめの家		
発表者： 仁川 恭臣	アドバイザー：植村康生		
共同研究者：宇津木 忠			
電 話	03-3969-3130	F A X	03-3969-3155
今回発表の事業所やサービスの紹介	社会福祉法人不二健育会『グループホームかもめの家』は、平成 19 年に開設。東京都板橋区東坂下にて、認知症対応型通所介護 1 単位 12 名、グループホーム 2 ユニット 18 名を運営しております。また、平成 26 年 4 月より、共用型認知症対応型通所介護、平成 27 年 1 月より短期利用の運営も開始し、地域の方々を施設全体で支える複合型施設となっております。常勤職員 10 名・非常勤職員 9 名が在籍。		
《1. 研究前の状況と課題》 平成 26 年度よりフロア単位での職員配置を撤廃し、入居者 18 名をケアしてゆくジョブローテーションを展開。職員共助や幅広い視点での気づきが多くなるという利点がある一方、入居者一人一人の情報の共有が円滑に循環しにくくなっていた。また、平成 26 年度より新規事業『共用型デイサービス』の運営が開始され情報の共有がより重要視されることとなる。 支援経過記録の管理を介護プログラムによるデータ管理へと移行した事で日々の記録において重複する作業は無くなった。 しかし、PC スキルの違いやデータ管理方法が定まらず、その記録は「日々の出来事」に留まり支援計画に直結は殆どなされていないことが判明する。そこで、記録システムを有効に活用し、個別ケアプラン目標に基づいた日常生活支援記録を残すことができる仕組みを考案。職員全員でこの課題に取り組んでいった。		《2. 研究の目的ならびに仮説》 全ケアプランの長期目標の内容に即した記録を充実すべく、短期目標から優先順位を選定する。その上で根拠に基づいた支援を実践すべく、ケアプランの短期目標から『統一短期目標』と設定し、より重点を置いて端的に記録を残していく。 統一短期目標の経過記録を送り項目として介護ソフト内で処理し、一か月ごとの記録数の推移を算出してゆく。 この記録を約 3 か月の対策実施期間中に全 18 名の入居者に対し 1 日 1 件残す事とする。 また、4 カ月周期で行われるケアプラン更新に伴い、家族・ケースカンファレンス開催時に提供結果として件数や内容を提示する。 これにより生活のご様子を可視化することで、ご家族様と共にご入居者様の ADL・I A D L 向上を目的とする。	

《3. 具体的な取り組みの内容》

【現状の把握】

- ① 短期目標に則した支援経過記録数が1か月平均として6件と低下している。
- ② 各入居者別に支援経過記録数を換算すると偏りが見られ、ケアプラン内容の提供にもムラが生じている。
- ③ 介護プログラムの操作にあたりPCスキルにバラつきが生じている。
- ④ 記録に関する蓄積されたデータの管理が確立されておらず、誰でも閲覧ができていない。

【要因分析】

- ① 紙媒体が多い…情報の風化が見られる。
- ② 確認する書類が多岐にわたる…必要とする情報を得るまでに時間が掛かる。
- ③ 職員によって把握レベルが異なる…一貫したケアサービスの提供ができていない。
- ④ 確認する時間が無い…日々変化する入居者の状態を把握しきれていない。

【対策の考案・実施】

- ① 記録を電子化しスリム化
支援経過記録の時間軸に左右されずに見直しが可能となる。
- ② 記録管理を一本化
記録項目ごとに検出・索引をすることで必要とする情報を得るまでのタイムロスを軽減。
- ③ 誰でも簡単に把握できる仕組み
各入居者の状況把握を全職員が簡潔に出来る様にする。ご入居者様・ご家族様の同意を得た上で居室内に取り組み内容を掲示。
- ④ いつでも確認できる仕組み
対象記録内容を介護ソフト内の検索機能にカテゴリ化し件数を算出、記録媒体を索引する為の時間を短縮。

介護ソフトを活用し、上記の4点に取り組む。

《4. 取り組みの結果》

平成26年度11月時点で1日平均記録数が最大値18件に対し16.83件。目標達成度は93.5%となり達成には至らず。ただ波及効果として、支援経過記録を重点的に残す事によりご入居者が生活の中で、ご自分で洗濯が出来るようになった、ご家族へ手紙を書かれたなどQOLの向上が見られた。また、記録が見えることにより統一したケアが当たり前に実践できる環境を整えることができた。

職員の意識の変化としては、記録を作成する為に職員間でのコミュニケーションが芽生える、読み手が受け取り易いように文面を考慮する意識が生まれる、といった変化が見られた。

《5. 考察、まとめ》

毎日のケアの中でケアプランを意識することが当たり前となり、入居者だけでなくご家族の理解や満足を得る機会ができた。

記録の重要性は理解できたが、記録を円滑に作成する為のスキルや時間の作り方等の対策が必要となると次の課題が明確化された。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）及び介護ソフト管理事業に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを証明し、回答を持って同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

特になし

《8. 提案と発信》

多忙な業務の中において記録を細かく残していく事は、どの事業においても最重要課題である。事務作業の効率化は、ご利用者への時間還元できる唯一の方法であると考え。第三者が見ても、手に取るように分かる記録を今後も目指していく。